
雪の継承者

響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の継承者

【著者名】

ZZマーク

【作者名】

響

【あらすじ】

沢田綱吉の兄 沢田響が並盛にやつてきたー?
響やツナなどの仲間たちとの友情、京子との恋愛、などなど
響はいろんなことを並盛で経験していく。
成長の果てに響を待ち受けているものとはー?

響、日本に来るーー（前書き）

お初ですーー

このたび初投稿させていただく響と言いますーー

REBORNの原作を大事にしたい方

京子はツナの嫁だよという方

オリ主なんて嫌いだ、という方はご遠慮ください

ーーーーー

響、日本に来る！！

「プロローグ」

イタリアにあるマフィア・ボンゴレファミリーの本部で、ある男がボスの部屋をノックする。

？「ボス、入つてもよろしいですか？」

？「ああ、大丈夫だ。入れ。」

男が部屋に入ると優しい顔つきの老人がいた。

この老人がマフィア・ボンゴレファミリーの現トップ“ボンゴレ”である。

？「ボス、何用ですか？」

？「家光よ、お前の息子も元気に育つていてるそうだな？」

9代目としゃべっているのは門外顧問の沢田 家光である。

家光「ええ、綱吉も響も元気に育つてますよ。9代目」

家光はとてもうれしそうに言つ。この男、親ばかである。

9代目「響ここにきて5年になる。ボスの後継者候補が綱吉君だけになってしまった今、彼らと一緒に暮させて、ボスをどボス補佐の教育したいのだが、どうかね。」

そう眉をひそめながら、9代目は家光に言つ。

家光「そうですねえ… 息子たち同士も久しぶりに会えるので、喜ぶと思いますから、私は賛成です。」

家光も一瞬眉をひそめるが、息子が嬉しがるのが想像できたのかほほを緩ませる。この男、やはり親バカである。

9代目「そうか、ならさつそく手配させよつ。家光、響を呼んできてもうえないかね?」

9代目は苦笑しながらも、家光に頼みじとをする。

家光「了解しました!! では、失礼します。」

家光は、頼みじとを受け、部屋からでて、響がいる部屋へ向かう

家光「ふふ～ん、響は綱吉と会えるのか、嬉しがるだらうなあ～。
はつ～!俺は、綱吉や奈々に会えないのか――――（泣）」

家光が泣き崩れていると、向こう側から銀髪のぼさぼさ頭の少年が歩いてきて、
家光に言つ

? 「父さん、なにやつてんの?」

と少年はいつ。この子が沢田家光の息子 沢田 韶である。

若干壊れ気味で響に飛び込む。

響は言うと同時に殴りかかつた。

カツ ハキイ レンガテカツ シヤーリン

響「気色悪いんだよ……」の肩がツ……」

響は切れて、親父をぼーじぼーにした。
“WINNER”響“！—！”

家光「ふいまふえんでふいた。」

と、腫れた顔で謝る。

響「まあいいよ。で、一体何の用なの？」

と、首をかしげながら聞く。

家光「ああ、9代目から話があるそうだ。」

と、まじめな顔で言つ。

と、言いながら走つて行つた。

家光「そんな、走つていかなくてもいいじゃん。〇一二」

「ボスの部屋」
バンツ

響「9代目、失礼するよーー！」

といいながら、部屋に入る。

9「マナーは守るべきやぞ。」

と優しく諭す。

響「じゃあん、じゃあん。で、話つて何？」

と笑いながら囁く。

9「響よ、綱吉君のいる並盛にこつて、綱吉君と一緒に暮しなさい。

」

とまじめな顔で話す。

響「本当ですか？ シナと会えるのはすいへんれいにので、よがい
んでいかせてもらいます。」

とまじめに返す。

9「では、1週間後こ、日本に行きなさい。手配はしておへか。」

京「わかりました。では荷造りをしておまか。」

と、部屋を出でていった。

「1週間後

「空港

響「見送りなんていいのに……」

家光「あっちでも元氣でやるんだぞ！　いじめにあつなよ？　なんかあつたらお父さんに言えよ？　絶対にたすけにいってやるからな！！！」

響「ハハ……大丈夫だよ。しつかりやれるからや。」

アナウンス『日本行きのお客様は――機乗リ口に行つてください。

』

響「じゃあ、行つてくれるね。バイバイ

家光「ああ、バイバイ（泣）」

「ひして響はツナのこる日本・並盛旅立つていった。

響、日本に来るーー（後書き）

プロローグを書きましたーー

次回は設定を書きたいと思います

設定（前書き）

「今度は設定と云ふことで
じまじまやー！」

設定

名前 /

沢田響
さわだきょう

年齢 / 13才（連載当初）

身長 / 168.5cm

体重 / 52kg

好きなもの / 京子 甘いもの 仲間

嫌いなもの / 仲間を傷つける人

性格 / 気さく、だけど、まじめになると、超ツナのようになる

備考 / ツナの兄 武器は大鎌 死ぬ気の炎は、白色 死ぬ気丸所持
ボンゴレ^{ブリーモ}?世^{チモ}も同じく双子だった。

顔つきは、YoutubeのメルトのツナVERを参考にしてください。

ボンゴレ?世^{チモ}はツナ 韶^{ハシ}はボス補佐とします!!

設定（後書き）

次は響とツナの再開を書きたいと思います！！
では次回をお待ちください

第1話 韶、並盛に帰つてへるー？（前書き）

はいー響です！！

執筆しはじめて、小説家のつらさがわかるこの頃です…
ですが、頑張つていきますので、感想・評価をお願いしますーーー

第1話 響、並盛に帰つてくるー?~

～空港～

響「ふああー、やつと着いた。元気にやつていろかな？ いつちの学校でも楽しくやれたらいいなーー！」

響はイタリアから日本に12時間かけてやつとつこたのだ。あくびをかきながら、電車に乗り換え、並盛に向かう

～シナリオ～

小学校を卒業して、一週間が過ぎたけど、俺は遊ぶ気力も起きなくて、家でじろじろしていた。

あ、俺の名前は沢田 繩吉 さわだ つなよし みんなからダメツナつて言われちゃつてるダメなやつなんだ。でも、そんな俺にもすごい兄がいるんだーー！響つていう双子の兄なんだけど、とても優しくて、いつも助けてくれて、とってもカッコよくて、大好きだったんだーー！俺たちが小2のころに、父さんについて行っちゃったんだ。

また、会いたいなあ。

？「ツーッ君、お風呂はんよー

ツ「わかったあ。今、行くよ。」

俺を呼んだのは、母さんの沢田奈々だ。いいことがあると、料理をいっぱい作る癖がある人なんだけど、優しい母さんなんだ。おつと、もうそろそろ降りていかないと……

～リビング～

奈「シーフ島、やつと来たね。早くお魚はなん食べましょう」

ツ「う、うん、いただきます（汗）」

俺は驚いたよ……だって、すごい量の（）はんなんだから、ここまでの量は、今まで見たことないんだよなあ……どんなことあつたんだろ？

ツ「こんな量作つたつて」とせ、すいへいことあつたの？

奈「鋭いわね。そうよ、なんたつて今日は響が帰つてくるから、もおー楽しみで、楽しみで」

ツ「えつ、ほんと（）やつた、うれしいな、響とまた会えるんだあ……」

母さんの知らせで、ものす（）こいこじだつてわかつたと思つたから、ベルが鳴つた、響のかな？早く迎えに行こう……

～ツナSHIDE END～

並盛駅についた俺は、沢田家に向けて、歩き出した。

響「（シナ、元気になつてたかなー？ 5年ぶりだから、ほんとに楽しみだ）」

ヒカキウキしながら、歩いていると、

？「キヤーー。」めんなさい。」

という声が聞こえ、そちらを向くと、中学生一人組の不良に絡まれている、可愛い女の子がいた。

不A「（ぐへへ、レベル高い女だぜ、俺らのものじょーーー）おー、嬢ちゃん、俺らの服がビショビショだよ、責任とつてくれよ。」
不B「（へへへ、最高だぜ、俺らーー）やつだな、責任とつてもうおつか。」

下心丸出しの不良たちをみて、響に怒りが溜まつてくる。

女「し、しめんなさいーー。」

女の子は、涙目になりながら謝る。

不A「じゃあ、しつかり来てもらおつか。」

と女の手の手をとつて、路地裏に連れ込もうとする。

女「キャ、やめてください...。」

と弱弱しく抵抗する。

不思「おまえじへしゃが「アーリーで」に」れ、ってだ、誰だよ
おまえーー。」

不A「お前には関係ないだろ！！」

響「そうだが、女の子嫌がつてるだろ。やめろよ。」

と響はキレ氣味に止めに入る。

不A「うるせえ！！」

と殴りかかる。

女一
キヤ一

バキイ！！

響 おーいてえな、お前らどうなつてもしらねえからなーー！」

そして、2対1の喧嘩がはじま……らなかつた。

バキイ ドカア 不B やつ やめ ry ギヤー バタツ

響 あと・・お前一人だ。

不A「ヒイ、お、覚えてやがれーー！」

ズルズルとBを引きずりながら逃げていく。

響「君、大丈夫だつた？（ニコニコ）」

と微笑みながら女子に問う。

女「（ドキッ）…はつ。はい、だ、だいじょっぷです／／／（か
つこいいなー、なんかドキドキするよ。）」

と顔を赤らめながら、返事する。

響「そつか、良かつたあー（ふうー）。じゃあ、俺は、行くね。

と去ろうとするが、女子に止められる。

女「待つて下さいーーあ、あの、お名前聞いてもいいですか？」

響「俺は、沢田響だよ。君の名前は？」

女「私、笛川京子つてあります。」

響「うん、かわいらしく名前だね（ニコニコ）

京子「はう…／／／あ、ありがと、やれこまます／／／

と京子は顔を真っ赤にする

響「ハハハ、じゃあ、俺は行くね。京子ちゃんも気をつけたね。」

京子「あ、あの、また会えますかーー。」

響「また会えるわ。」

そして、響は帰つて行つた。

響は京子と別れて、家に向かつていた。

響「（あの子、可愛かつたなー、また会える気がするよ）」

なんて考えていると、家に着いていた。

o

そして、響はベルを押す。

すぐにドアが開き、こう言われた。

ツ／奈『おかれり（なさい）』響—・』

響「ああ、ただいま！！」

こうして響の並盛での波乱に満ちた生活が始まった。

～おまけ～

京子「／＼／＼（響き） カッコよかつたなー」

？「京子ーー！」めん待つ・・・た？ ねえ？」

京子「ぼー／＼／＼

花「銀髪の男の人（ボソッ」

京子「ボンツ／＼／＼ 花！…なんで知ってるの？」

花「さつき、話してゐるの見ちやつたからさ、黙つてよいとおもつたんだけど…（ニヤニヤ）

京子「違うからね、惚れてないからねーーー！」

花「ホントに？」

京子「ほんとこーーー！」

花「親友の私にはわかるのよ。京子は、あの人に惚れたのよーーー！」

京子「あう／＼／＼ やっぱりわかっちゃうの？」

花「あつたりまえよ……応援するからね。」

京子「ありがと／／／花」

花「いいつことよ。」

なんて話があつたことは、響が知るよしもない話だつた。

第1話 譲、並盛に帰つてへるー.? (後書き)

今回は、自分の家に帰つてへるまでを書きました!!
そして、その短い間に京子けやんも落とすとせ、恐ひしこそー.? (笑)

次回は、原作に入りたいかと思います!!-!!-!!
ではでは、次回を楽しみにおまちください!!-!!-!!

第2話 韻、鳥匠と再開！？～前半～（前書き）

どーも、響です！！

1話長いですね…；

なので、分けて入れたいと思います…！

第2話 韶、師匠と再開！？ ～前半～

第2話 昔の師匠来る！？

体育館では、バスケが行われていた。

生徒A「ツナ！..ボールいつたぞ！..」

ツ「へ？

ベチャ

ツナの顔に、ボールが直撃する。

ツ「あ、いつてー。」

生徒A「おい、ツナ！..なにやってんだよー。」

ツ「『、『めん。』

ツナはボーッと立っていたことを謝る。

響「大丈夫か、ツナ？」

響が心配そうな顔で聞く。

ツ「うん、大丈夫だよ！..」

顔をおさえながら、返事をする。

試合終了後

生徒A 「お前のせいだからなーーー！」

とツナに向けて、怒声を飛ばす。

ツ
一
つ
！
一
ご
め
ん
；
「

少し、ひくつきながら

生徒A - これが何ですか？ これがお願いね

生徒B 俺たちが貴重な放課後をたのしみたいからさ。

として笑しながら去っていく

お前にもやれるだよ。」

響たちが進むと、あこひらま「んな」とを書いていた。

生徒A - あいこ - マシためたなー（笑） - テストは? -

レニンも赤点！！

生徒A 「スポーツは？」

『ダメツナがいるチームはいつも負け！！』

生徒A 「マジで不思議だよな。ダメツナとキョウウが兄弟なんて、なあ？」

『わうだなー、七不思議一つだ（笑）』

響「おい、待てよ」

と殺氣染みながら、追おうとする

ツ「いいよ、キョウ。おれはどいつせ、馬鹿でで音痴だから。相手にされなこよ。」

とツナはネガティブに陥る。

響「そんなことないって！… あいつは、お前の魅力に気付いてないだけだからさ。」

とツナを響は慰める。

～響SHIDE～

ツナを慰めていたら、外からこんな声が聞こえてきた。

花「もつと積極的になりなこよ。」

京子「む、無理だよー。だって、話そつとすると、頭が真っ白にな
っちゃうんだもん！..」

花「だけど、そんな感じじゃ、いつまでたっても振り向いてもらえない
いよ？」

つて、話している。ふーん、京子ちゃんに、好きな子でもいるのかな
？だれだらう？

（響SIDE END）

（京子SIDE）

花とキョウウ君のことを話してたら、
？「おまたせ、京子！..」

京子「あ、持田センパイ。」

つて持田センパイに話しかけられた。持田センパイが花のことをち
らちらみてる。好きなのかな？

花「私は行くね、『ゆつくじー（ほんとはヤダけどね、積極的なら
ないからだよ、これ。わかった？）』

京子「もー花つたらー。（う、うんわかったよ、私頑張るよー..）

京子SHDE ENDS

響は京子と持田が一人つきりなのを見て、イラついていた。

響 (なんだる、すうげえ イラつく) ちり・ちる・「

「ああー、やーはーり、剣道部主将とできただー！」 orz

と響はイラつかず、ツナは落ち込んでいた。

響 - なあ - ツナ?」

シ なに?

響 - 帰らね? なんかモニ、まんなしわ

ツニシタね帰ニシカ

沢田家

響たちが学校をさほって、家で「じゅじゅ」していると、奈々が話かけってきた。

奈々「綱吉、響、学校から、電話があつたわよー。また学校サボつ

たんですってー？ もう、将来が心配よ。」

と奈々が心配しているが、

ツノ響『なんとかなるさ(よ)』。

なんで、二人揃って、のんきに返す。

奈々一だからね、家庭教師を雇つたの!!

とシナたせにガミンケツツセキする

ツノ響くはるる一月
！なぐてのいらないたゞ（）よ

と部屋からでて、抗議する。

奈々一
でりも
せんじき
たの

ツノ響『だから、いらない？「チャオつす」つての・・誰（リボーン！？）？』

リ「久しぶりだな、キヨウ。そして、はじめてましてだ、ツナ。」

奈々「ボク、どこの子?」

といつの間にかいだ赤ん坊に話しかける。

り「ん。」
おれは家庭教師のリボーンだ。」

ツ「ぶつ——！！」

奈々「あら、まあ。」

とツナは爆笑し、奈々は驚く。

ツ「この赤ん坊に教わることなんてないよ。響「ツナ、やめといた方が…」へつ？」

ドカツ…！ 赤ん坊に殴られ、ツ「ほむつ…」バタツ と氣絶するツナ。

響「（こわつ…）母さん、リボーンは優秀だから、下に行つて大丈夫だよ。」

響は若干震えながら、母さんに勧める。

奈々「そ、そう…じゃあ、お願ひしますね」

と降りて行つた

（一時間後）

ツ「はつ…！ なんだつて、おい、起きるよ…！ 赤ん坊だからつて許さないぞ…！」

ツナは怒つて、リボーンを起しにゆうとする。

響「やめと」

響が止めようとした時、

クン、バツシーン リボーンはツナのネクタイをつかみ投げる、

ツ「いつでー、なんだこのガキー！……」

ツナはたづなめわる。

リ「俺にすきはないぞ。本職は殺し屋ジマツヤだからな。」

そういうて鞄をひらいて、銃を組み立てる。

リ「俺の本当の仕事は、お前をマフィアのボスにする」とだ。

と、リボーンは、ツナに自分が来た理由を話す。

ツ「はあ、マフィアだつて！？ しぃじられないよーー。」

ツナは信じられないらしげが、

響「ツナ、これほんとなんだ…。ツナはマフィアのボス候補なんだよ。」

響がこいつで、信じるしかなくなつた。

ツ「まじかよ…じゃあ、キョウがボスにしたほうがいいよーー。」

ツナが一番に思つたことを言つと、

リ「それは、ボンゴレの捷なんだ、双子の候補の場合、弟をボスにするといつも、これは初代がそつだつたからな、そつこいつことになつたんだ。」

初代のボスとボス補佐が双子でボスが弟、補佐が兄だったというのを聞いて、

「まじかよ。」

リ「ある男からな、お前を立派なマフィアのボスに教育するよう依頼されてんだ。」

ツ一せだよ、そんなの。黒鹿じやないの!?

リノ響『一発撃ごとくか?』

と青筋立てながら、響たちば詰つ

ツ「なんでキヨウまでえ――――!」

びびりながらも、ツツコむツナだつた。

響「いや、俺も、リボーンから、授業受けててな、尊敬してんだ。
だからさ、否定されたらさ… なあ？」

リ「ああ、そうだな。」

「じゃあ、キョウはなにを教わってるんだ？」

ふと、浮かんだ疑問をぶつけるツナ

立派なボス補佐になる教育だ。

響「まあ、そういうつたな、俺も頑張るからせ、ツナも頑張れよ。

「

響は、さわやかに笑いながら囁く。

グウウ——

リ「あばよ」

リボーンの腹が盛大になると、リボーンは、出ていく。

ツ「どう行くんだよ——」

響「まあまあ、落ち着いてね。」

響は、イラついてるツナをなだめる。

ツ「キョウ、俺出かけてくるわ。」

と囁つと。

響「俺も、ついて行つていいか? 腹でさ——」

とあぐびをかきながら、囁つ。

ツ「まあ、いいよ。」

承諾したツナと響は下におりていったのだった。

ツ「母さん、キョウと出かけてくる。」

「リビングへ

奈々「ご飯は～？」

とツナたちに聞く。

「いらない、外で食つから、金頂戴。」
「けど……」

奈々「ん？リボーン君はね、ツナの成績があがるまでの住み込み契約なの。キョウは、ついでにみてくれるんだつても。」
と満面の笑み浮かべて言う。

ずっと
ん

「マジですかあ――――――――!」

後半へ続く

第2話 聲、歸郷と再開！？～前半～（後書き）

今回は、リボーンとの並盛での出会いを書いてみました！――！
次回で、1話を終わらせたいと思います！――！

キヨウ／＼S持田はどうなるのか！？

期待して待つて下さい――（――）――

第2話 韻、師匠と再開！？～後半～（前書き）

はい、後半をかきました！！

やつぱり大変ですね！！

でもこれからも頑張っていきますので、応援よろしくお願いします

！！

第2話 韻、轟と再開！？ ～後半～

～後半～

ツナたちは、ぶらぶらと散歩をしていた。

ツ「キヨウはまだしも、なにでお前までついてこないだよーー。」

リ「ここじゃねえか。殺すぞ！」

とツナに銃を突きつけた。

ツ「なんでそうなるんだよーー？」

響「リボーン、やめてくれよ。」

なんて話してみると、前から、京子がやつてきた。

ぱつーーーとツナが隠れる。

京子「あ、キヨウ君、授業じついたの、出てなかつたけど、ついて

その下、可愛こねーーー」

響「んー、ちよつとねーーー

リ「ちよつとねーーー

京子「そつかあ。ねえボク、どうしてスーツ着てこいの？」

とつボーンの皿線に呑ませてしまへる。

リ「マフィアだからな」

京子「わあー、かつこーこね。頑張つてね、バイバイ

響「ん、じゃあな。」

と、京子は帰つて行つた。

ツ「あこつ、いきなり京子ちゃんに氣にこられたるみーー

響「まあまあ、落ち着けつて。」

憤慨するジナをなだめる響。

リ「マフィア、モテモテ」

響「（イライ）それは、ないんじやないか？」

にせつと笑つてこうリボーンに、イラッつとへる響。

リ「ふつ、相性できないだる。それは、お前が妬いてるからじやないのか？」

からかいつぱいに笑つリボーン。それこまた響はこらだりを慕ひむ。

ツ「（えつーへキ四つは京子ちゃんの）とが好きなの？）あ、キ四ウ、ホントなの？」

とツナは不安に思いながら、訊く。

響「わかんないけど、今と持田としゃべってたときも、イラッとしたな。」

思い出しながら、しゃべる響。その時を思い出したのか、眉をひそめる。

そして、ツナが顔をうつ向く。

ツ「（やっぱり、好きなんだ京子ちゃんの事）はあ～

リ「それを、やきもちひいていいんだぞ。」

響「そうなのか～、これがやきもちねえ～

なんとも、釈然としない顔で返す。

ツ「はあ～」

リ「そうだぞ、だから、行つて来い

と響を急かす。

響「ちよつと、待てよ… いまから、やだよ。つづりナヘビ」
「たんだ、暗い顔して？」

ツ「なんでもないよ… 頑張つてね、応援するよ…

心配そうに訊かれたツナ、作り笑顔をつくつて囁く。

リ「早く行けよ。俺が素直にさせせる。」

銃を響に向けて

「や、やめる。あれだけは“バーン”がつ……」
撃つた

ツ「おー……向やつてんだよ……」

リ「まあ、いいから見てろよ」

地面に倒れていた響が額に炎をともらせ、こきなり立ち上がる。

響「……俺は、京子が……好きだ……」

と壇つと、急に走り出す。

ツ「え、え？ キョウビリしたんだ？」

状況についていけないツナ、響が走り出したことの意味がわからな
いのか、首をかしげている。

リ「ツナ、キョウを追う。」

ダダダッ リボーンも走つて行つてしまつ。

ツ「ちよ、待つてくれよ~

タツタツタ ツナも響たちを追つていった。

～響 SIDE～

アドア

ああ、理解したこの気持ち、これは京子が好きだってことなんだな。
だから、持田としゃべってた時も、リボーンに 관심がいつてた時、
いらだつたんだ。

ああ、この気持ちを京子に伝えよつーー。
ビリだ、ビリにこーるーー！

アドア

～響 SIDE END～

それからじしまじらへして響はまだ走っていた。

アドア

持田「なあ、京子。」

京子「なんですか？先輩（キョウ君）どうして近づいていたか考えて
たのにい！ー）」

持田「今度、テー「…見つけた…」げふう」

持田が覚悟を決めて、誘おうとした途端に、誰かに蹴り飛ばされた。

持田「誰だよ…」

と顔を上げると、そこには、響だった。

京子「キョウ君!?

響「…」

じつと京子の顔を見る

京子「キョ・ウ・君?」

いつもは気さくな響が無口で真面目な顔をしているのに顔を真っ赤にして驚く京子

京子「ボー／＼（いつもと違つ真面目な顔で、私のことをじつと見てるよ～。え、えいじよ…）」

持田「お前、一体何の用だよ…いきなり現れやがつて。（俺が頑張つて、決めよつとしてたのに…）」

響「…京子に…言いたい事…あるんだ」

京子「え、私!?」

響「ああ…俺は、「待つて…」…？」

京子「あのね、まだ心の準備ができてないから、言つのは明日でもいい／＼…？」

響「どうした…？」

京子「あのね、まだ心の準備ができてないから、言つのは明日でもいい／＼…？」

と手をもじもじさせながら上田づかいで言つ。

響「！…・・・わかった／／／」ダッ

それを直視した響は、顔を真つ赤にして、逃げて行った。

京子「ふう。先輩、私帰りますね。（ちやんと話せめるよつて心落ち着けとかないと…）」

と持田を残し、顔を真つ赤で去つていく京子

持田「待つてくれよ。沢田あーー覚えてるよーー！」

と一人捨て台詞をはいて去つていく。あわれwww

ツ「キヨウ、ビニにつたんだろ?」

俺は、急に走つて行つたキヨウがビニにいるか、探し回つていた。

リ「そんな遠くには、行つてないはずだ。」

ツ「そつか。つてあれなんだよ、キヨウの頭撃ち抜いてたのに生きてるなんて、おかしいだろ!!」

俺は、あの時の摩訶不思議な現象について、リボーンに訊いてみたんだ。

リ「あれは、死ぬ氣弾というんだ。」

ツ「はあ、死ぬ氣弾!?」

リ「あれは、死んだ時に思つていた、未練を死ぬ氣で行動に移すもんだ。」

ツ「つてことは、死んだ時に、キヨウはなにを未練に思つていたんだ?」

その摩訶不思議現象は理解できたんだけど、キヨウは何を思つていたんだろう?訊いてみようか。

リ「それは、だ「京子への気持ちだよ、ツナ」だそうだぞ。」

ツ「き、キヨウ!何してんだんだ?」

突然現れたから、びっくりしたよ……で何してたか訊くと、

響「京子に告白に行つた。」

ツ「へー京子ちゃんに告白ねー…って告白…？」
まじかよ…やっぱいやん、やっぱこよ…？…俺も、京子ちゃんのことが好きなこと…？」

リ「で、どうだつたんだ？」

そ、そりだよな、結果が気になるよ…。

響「明日に保留になつた。」

それつて、期待大じやん…？

リ「そつか、よかつたな。じゃ、帰るわ…！」

響「ああ、そうだな…」

トリボーンヒキョウが帰つてこくよ。

ツ「ああ…まつてよーー」

でも、キョウがあんな幸せそつな顔するんだ、俺は、応援しようつ…。

～ツナSHDE END～

（翌日）

並盛中にて

響が教室に入ろうとする

ガシッ！！

と腕を掴まれた。

響「なんだよ？」

生徒A「持田先輩が、呼んでるぞ。道場で待ってるってさ。」

響「わかつたよ。道場だな。」

と響は道場に向かって歩いて行く。

『なんだ、なんだあ！？ なんか、面白そうだなーー行つてみようぜーー』

と野次馬精神でぞろぞろと道場へ向かっていく。

花「持田先輩、昨日あつた事の復讐だつてさ。」

京子「えつーー！ 花、行こーー。」

花「う、うん。」

花は京子の剣幕に驚きながらも、ついて行く。

（道場）

（持田SHIDE）

昨日の屈辱は忘れないぞ！！沢田 韶！！

ガラつ 韶「失礼しまーす」

持田「来たな！！昨日のことで決闘を申し込む！！！」

響「わかりました。でルールは？」

くくく、乗ってきたな、京子の前で恥かかせてやるぜ！！

持田「ルールは単純、10分間で1本でも俺から取れれば、お前の勝ちだ。賞品はもちろん、笠川 京子だ！！」

京子「しょ、賞品ー？」

花「最低ね」

響「…着替えてきます…」

あいつに勝てるわけがないんだ！！あいつが使う防具、竹刀には2

人で持つがやつとのウエイトを埋め込んだ。そして、なにより、審判は俺の息がかかっている。俺の勝ちは揺るがない！！

響「お待たせしました、これかなり重いんで付けなくてもいいです
か?」

持田「！！ああ、大丈夫だ」

まさか、ばれたのか!? いや、それでも俺の勝ちは揺るぐはずがな
いんだ!!

響 「 そうですか。なら、始めてください。」

部員A - 試合開始!!

持田：俺が手加洞するっても思つたのか？「アカカ！？」

これで俺の勝ちだ！！

持田SHIDE ENDS

響 S I D E S

防具付けてみたけど、ふつうの重さじゃなかつた、そこまでして勝ちたいのかね。まあいいつけないで出て、あいつに絶対勝つだけだ

あいつは京子を賞品扱いしゃがった！―だから、絶対ぶつ飛ばす。

部員A 「試合開始！―」

持田 「俺が手加減するとも思ったのか？ ブーカが！？」

そう来ることはわかつてた！―

響 「遅い！― 面！―」

スパーク

俺はやつの右へ避けて、きれいに決めた。でも、審判は、旗を揚げねえ。やつぱりか、ならあいつにギブアップさせるまでだ！―

持田 「なぜ！？ 避けられただと？」

響 「…取り消せ。」

スパーク

と俺は言ひながら、右腕に2回叩てる。

持田 「…な、なにをだ？」

響 「…京子を物扱いしたことをだ。」

スパーク
パンと、今度は胸に決める。

持田 「う、うるさい…。」 「…なら、もつしゃべるな」 ひい おい、
加藤あれをやれ！―」

響「…？」

不思議に思つてゐると、ツナが人質になつていた。

加藤「キヨウ、動くんじゃねえぞ！…ツナがどうなるかわかんねえぞ！…！」

ツ「ひいい…」めん、キヨウ。

響「…卑怯な。」

ふざけるな…」んなのないだろ？が…まじで殺意が湧いてきたぜ

リ「こんなとこいじや、俺の出番だな。」

力チャ ズキュー

音が聞こえたと思つたら、ツナの額が撃ち抜かれていた。

『キヤああああああああああ

ツ「リ・ボーン！…死ぬ氣でお前らをぶつ飛ばす…！」

ツナの死ぬ氣で部員（審判・持田除く）がぶつ倒される。

響「いれで…一対一だ」

「…まで卑怯なことをしたんだ、わかつてんだ？

持田「くそあ…だが、それでも、勝つのは俺だ…」

と俺に自棄になつて向かつてくる奴の後ろに回つて、手刀を決めて氣絶させる。

響「俺の勝ちだよな（黒笑）」

部員A「勝者 沢田 韶ー！」

『わあああああー！ー！』

審判が勝ちを宣言すると、まわりから喚声があがつた。
そして、俺は京子のもとへ歩いて行く。
一步一步歩いて行くたびに周りが静かになつていく
そして、京子の前へ辿り着いた。

～響SIDE END～

まわりが静けさを保つているのを破つたのは、響だった。

響「京子」

と京子を呼ぶ。

京子「はい／／／」

京子は、顔を赤らめながら、返事をする。

響「俺、沢田響は笹川京子のことが好きです／／／。付き合つても
らえませんか？」

響が赤くしながら、自分の気持ちを京子に伝える。

響ことひつひこの待ち時間が何時間にも感じた。

京子「は、はい／／／私、笠川京子も沢田響のことが好きです！－
よ、よろしくお願ひします！－！」

京子は、涙をぽろぽろこぼしながらOKをだす。

響「京子！－」

といいながら、抱きしめる。

京子「響君／／／」

京子もそっと抱きしめ返す。そして、お互に見つめあい、顔を近づけていく。

そして、みんなの前で、一人の影が重なった

～おまけ～

『ひゅーひゅー　お熱いねえ！！』

響／京子『／／／』

『おめでとーーーーーーー』

響／京子『あ、 ありがとーーーーーーー』

なんてこのカップルは祝福されていた。

第2話 韶、鷲匠と再開！？～後半～（後書き）

どうもー初戦闘描写（？）でした。
まだまだ拙い文だと思います！！精進します
京子と恋仲になりましたー！（てへっ 気持ち悪いwww
次は獄寺を出します！！

では、次回もお楽しみください（ーー）
感想・評価お待ちしています。

申し訳ありません！！

しまリニアの方が忙しいのでまた更新することできません
ごめんなさい。

ちくださこ（——）——

ちゃんと構想はねつてありますので、落ち着き次第更新という形になるとと思います。

これから展開を頭の中で妄想しつつ、リアルの方を片づけていきたいかと、そして、馱文ですが、自分の力をMAXにフル活用して、頑張っていきたいと思います。

もしかしたら、今度、アンケートをとるかもしません。その時は、なにぞご協力をお願いします!!

これからも雪の継承者を執筆してこなさるので、よろしくお願ひします！！

スモーキン・ボム来る

～教室～

とある日の並盛中のH.R.では、

先生「え～、今日は転入生が来ている。静かにするよ！」

男「先生！男ですか？女の子ですか？」

先生「男だよ。では、獄寺君はいつて」

ガラつ

ドアを開けて入ってきた男は教室に入つてくる。

先生「イタリアから、転入してきた獄寺 隼人君だ。」

女子「ちょ、カッコよくない！？」

女子は、獄寺の顔立ちに黄色い歓声を上げる。

ツナ「（ふ～ん、あーいうのが、いいんだ）」

『（隼人！？なんで・・・ああ、あいつが来たのは、リボーンのせいだな。）』

ツナが獄寺のことを見ていると、目が合い、ギロつと睨まれる。

ツナ「（な、なんだよ。）」

とツナがおびえてこらへ、獄寺はツナのところへ走ってきて、机を蹴つていぐ。

ツナ「（なにすんだよ。目があつただけじゃないか）」

『（せせり。やっぱ、あいつは変わんないな）』

ツナが憤慨しているのに比べて、キョウは懐かしく思つていた。

男子A「ツナ、知り合いか？」

ツナ「知らないよーー。」

男子B「あー、不良確定だな」

男子は獄寺の行動にビビっていた。

女子A「でも、やうこつところがしげれるー

女子B「ファンクラブ結成決定ねーー。」

逆に、女子は、やうこつ行動に、メロメロになつていた。

～H.R終了後～

ツナ「なんだよ、あの転校生。ああこうこうにまついてないな～。キヨウもエタ終わったらどうか行つやつし

などと愚痴りながら、歩いていると、ドン～～と何かにぶつかる。ツナが顔を上げると

不良A「おお、いてー 骨折したかも」

ハハハハ

と笑いながら、ツナに言ひ。

ツナ「「めんなさこ」…「めんなさこ」…」

と叫いながら、中庭に逃げていぐ。

ツナ「ふうー、あぶねー、下手したら半殺しだったよ。」

なんてツナが息をついていると、誰かに話しかけられた。

?「四に余るやわやだぜ。」

ツナ「… も、君は転入生の… ～も、それじゃ、これで

話しかけてきたのは、転入生の獄寺 隼人だった。それに気付いたツナは、そそくせとその場を去るうとする。

獄「お前みたいなカスをボンゴレーの代用にしたら、ボンゴレー アミローもおしまいだな。」

ツナ「えー？ なんで、フアミニーの」とを。

とツナとキョウウしか知らないことを言つてたのでツナは驚く。

獄「俺は、お前を認めない、10代田にふさわしいのは、キョウウさんだ！」

ツナ「なんだよ急に…そんなこと言われたって。ってか、キョウウのことを知つてゐるのー？」

ツナは、フアミニーの」と、キョウウの」となど、詫きたいのがありますぎて混乱する。

獄「前から見ていたが、やつぱり、キョウウさんのほうが優れないとしか思えない。だから、お前が消えれば、キョウウさんが10代田になるんだろう？だから、消えろ。」

と言つて、ダイナマイトを取り出し、点火する。

ツナ「えー？ ばばばば、爆弾！？」

獄「あばよ」

そういうで、ダイナマイトを投げるが。

ツナ「うわああああああ

ズキュウウウン

何かに撃たれて、導火線と爆弾が切り離されると、音が聞こえた方に顔を向ける。獄寺は舌打ちして、

リ「チャオつす

『おひさー、隼人』

ツナも声が聞こえた方に顔を向ける

ツナ「リボーンー！ キョウー！」

そこにいたのは、リボーンとキョウだった。

リ「思つたより早かつたな獄寺隼人」

『あ、やっぱリボーンが呼んだんだ』

ツナ「ええ！？ 知り合いなの？」

キョウとリボーンがそう言つてゐるのを聞いて、驚くツナ

リ「ああ、おれがイタリアから呼んだ、ファミリーの一員だ。会うのは、初めてだけだな。」

『俺も、知つてたよ。あつちで暮らしてたんだ、知らない方おかしいだろ。しかも、タメ 同い年だからつて会わされたんだ』

ツナ「じゃあ、こいつマフィアなのか！？」

キョウとリボーンの話に驚きっぱなしのツナ

獄「あなたが、9代目^{ヒカル}が最も信頼する殺し屋 リボーンか。そして、お久しぶりです、キョウ^{ヒカル}さん。貴方を10代目にして見せますからね。待つてて下さい」

『ありがと。でも隼人、ツナの良さをわかつてないからそんなことがいえるんだよ。』

ツナ「キョウ…何言つてるの？（ええ…？リボーンつてそんなすじいやつだつたの？それと、獄寺君にじこまで尊敬されるキョウつて…。それに、俺はそんなにすじくなじよつキョウ…）」

獄寺が言つてゐることと、キョウの評価に考え込むツナ

獄「そつですか。でも、じこつはキョウさんとほちがつて軟弱すぎます…！だから、じこつを殺つて、キョウさんが10代目に内定させます…！ そつしてくれるんだよな？」

リ「ああ、本当だぞ。んじゃ殺し再開な。」

ツナ「はあ…？何言つてんだよ…！俺を殺るなんて冗談だよな？」

リ「本当だぞ」

リボーンが言つたことに食いつくツナににべもなく返すリボーン。

ツナ「なつ、まさか、俺を裏切るのか？リボーン…今までのは全部ウソだつたのかよ…！」

それに怒るツナにリボーンはこう返す。

リ「ちがうぞ。戦えつて言つてんだ。」

といつて、死ぬ氣弾を撃とつとするリボーン

ツナ「俺が戦つー?じょ、[冗談じやないよーーキョウ何とか言つてよ」

リボーンの言つとが信じられないツナはキョウに助けを求める。

『ああ、悪い、このことに關してなにも手出しあるなつてリボーンに言われてんだ。』

といつが、キョウは、手出しあれないとツナのひのひを抜け取らない。

ツナ「そんなん、いつなつたらーー。」

と言つて、逃げだすツナの前に獄寺が立たざる。

獄寺「待ちな」

ツナ「うわあーー」

立ちふさがつた獄寺はたくさんのたばこをくわえ、その火種でダ
イナマイトに火をつける。

ツナ「なあーー。」

驚くツナにリボーンが淡々と解説をする。

リ「“獄寺隼人は、体のいたる所にダイナマイトを隠し持つた人間爆撃機だ”って話だぞ。又の名を、スモーキング・ボム・隼人」

『ああ、俺もあれにはびっくりしたよ。どこにダイナマイト持つてるんだろ?』

なんてキョウは首をかしげている

ツナ「そ、そんなの、なおさら冗談じゃないよ……」

と言つて、また獄寺から逃げてい途中で 獄「果てろ!!」 と
いう声とともに、ダイナマイトがツナに向かつて投げられた。

ツナ「どひゃあ」

と奇声を上げ、爆風に吹き飛ばされるが、それでも、逃げ続けて
たどり着いたのは……

ツナ「い、行き止まり!! ウソ!!」

獄「終わりだ!! 果てろ!!」

そして、窮地に陥つたツナをリボーンは

リ「死ぬ氣で戦え」

と言つて、死ぬ氣弾でツナの額を撃ち抜く。

『ツナ、頑張れよ』

とキョウも眞面目な顔をしながら応援する。

ツナ「リ・ボーン復活！！！死ぬ氣で消火活動！！！」

額に炎をともし、死ぬ氣で飛んでくるダイナマイトを手で火を消していく。

ツナ「消す！消す！消す！消す！消す！消すうーー！」

獄「なつ！？ 2倍ボム！ー！」

と全部、消された獄寺は最初の2倍のダイナマイトを投げる。

ツナ「消す！消す！消す！消す！消す！消すうーー！」

これもすべて消していくツナ。

獄「ならーー3倍ボム・・・！」「ポロッ”しまつーー（ジ・エン
ド・オブ・俺…）」

全部消された獄寺は最初の3倍のダイナマイトを投げようとするが、
ダイナマイトをこぼしてしまつ。

ツナ「消す！消す！消す！消す！消す！消すうーー！」

絶望に襲われていた獄寺を救つたのは、死ぬ氣で消火活動していた
ツナだった。

ツナ「ふうー。何とか助かつた。大丈夫だった？」

獄「！（殺そつとしたのに俺の心配をしてくれた！？） “ガツ”
御見逸れしました！！貴方も、ボスにふさわしい！..」

『（やつぱ、ツナはす）こな。気付いたら、引き込まれてる）』

ツナ「！？？」

助かつたことに安堵しているツナに、土下座して、大声を出して、
ツナに言つ獄寺。

獄「キヨウさんが継がない今、10代目はあなただ！！10代目！
！貴方について行きます！！」

ツナ「はあ！？」

目を輝かせて、言つ獄寺の言葉に驚くツナ。

リ「負けたやつが、勝ったやつの下につく。それがファミリーの掟
だ。」

『やつたな。ツナ！..』

ツナ「ええー！..」

獄「最初は、キヨウさんが10代目になるべきだと思つてました。
なのに、キヨウさんは継ぐと言わないし、ボス候補はキヨウさんじ
やないんでどんなにやつか実力を試したかつたんです。あなたは、
俺のために身を挺して、救つてくれた。だから、俺はお一人に命託
します！..」

『ボスはツナだからね、だから、ツナに命託してよ、俺の命もツナに託してんだ。』

獄寺が言つた、『一人に託す』に反応して獄寺に言つキョウウ。それがなく、自分の命も託すキョウウであった。

獄「そうですか。なら、10代田……貴方に命を託します……」

ツナ「い、よ・命託すなんて、獄寺君もキョウも。ふつうにクラスメイトじゃダメなのかな？」

命託されることになつて焦つたツナは、なんとか回避しようとする。

獄「キョウウ、そーはいきませんー、ダメだよ』

しかし、一人に即拒否される。

ツナ「（怖くて、言い返せない）。つーか、なんのこの状況。）

とツナが心の中で思つてみると、

リ「獄寺が部下になつたのと、キョウウがお前をボスの器があると認めたのは、お前の力だ。よくやつたな。」

ツナ「何言つてんだよー／＼／＼

と、リボーンが言つたことに照れていると、

？「ありやりや、サボちやつてるよ。」

「ひづら

という声が聞こえて、振り返ると、不良達がいた。

不良A「お仕置きが必要かな？」

不良B「サボつていいのは、3年からだぜ

不良C「何本前歯折つて欲しい？」

なんて笑いながら、ツナたちに言つ。

ツナ「（ゲツ！？やばいよ！…）

獄／キョウ『俺に任せてください！！／俺に任せろ！…』

獄「消してやる——————」

と獄寺はダイナマイトを構えて

『叩き潰す！…』

とキョウはファイティングポーズをとる。

ツナ「ちょー？だめだってキョウ、獄寺君！…」

と必死に止めようとするツナ。

ツナ初めてにして、ファミリー2人GET！

結局、ぼこぼこされた不良達だった。

全『な、なんで俺たちが・』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8190m/>

雪の継承者

2010年10月10日16時58分発行